

来館者が博物館に期待する潜在因子に関する研究

加藤 信男

Study of Visitor's Factors Expected in Museum

Nobuo KATO

The purposes of the present study were to propose some visitor's factors and to examine the difference in characteristic demand among different age groups. A questionnaire was developed and implemented which consisted of 30 items based on a conference with staff. The questionnaire was judged to have high reliability. The five factors for each group were interpreted differently. Five factors showed :Factor of eagerness to learn(= Eagerness for something new and unknown), Factor of interaction(= Desire for creating and developing rapport with curators and persons who share common interests), Factor of deepening learning (= Urge to deepen specific knowledge), Factor of satisfaction (= Craving to find something exciting and impressing), Factor of love for our home. The characteristic among different age groups was considered from the relation between five factors. This result has an important suggestion to the mission of the museum.

The future problem is to develop the learning methods so that visitors can enjoy learning through the cooperation of the museum staff.

問題と目的

岐阜県博物館は1976年の開館以来34年の長きにわたり、国際博物館会議 (ICOM: International Council of Museums) や博物館法第2条に定義されている博物館の姿に基づき事業を展開し、多くの来館者に学びの場を提供してきた。しかし、開館年の181,692名をピークに年間来館者数は減少の一途をたどり、1994年度は49,714名にまでその数を減らした。全国的にも博物館への来館者は、顕著な減少傾向にある (日本博物館協会, 2009)。その原因の一つに、来館者の心的状況を考慮することなく旧態依然とした取り組みを行ってきたことによる来館者からの乖離があげられる (布谷, 2005; 諸岡, 1990)。来館者の増加や来館者の満足のためには、この心的乖離こそが重要な問題であると考えられる。そこで、来館者が潜在的に持っている内的要求を調査・研究し、その把握の上に立って博物館の事業を企画・展開していくことを提唱したい。

現在の博物館は、市民参加型・体験型の運営が主体となる第三世代を迎えている (伊藤, 1986)。当館においても県民参加型のプロジェクトの立ち上げをはじめ、郷土の自然に立脚した確かな歩みを具現するためのアウトリ

ーチ事業を企画し行っている。これらの事業は、金山 (1999) が示す町づくりを包括し、来館者が生活の場において活動できることを課題とした社会の要請 (嘉多, 1995) にも応えることになる。しかし、当館を含む多くの博物館で行われる議論の中心は、博物館側の思惑に重点がおかれ、来館者についての見解は経験則のみで語られているのが現状である (榊原, 1992)。すなわち、本来、来館者に帰着して考究すべき論考が、経験則を論拠として展開されているのである。このような状況下での議論から導出される企画が、真に来館者の思いに応えられる事業となり得るのかについては疑問が残るところである。議論を深め来館者の思いに応えるためには、来館者側に立った確固たる論拠のもとで論究されることこそが重要だと考える。

来館者に関する先行研究とその問題点

来館者を捉えようとした先行研究を概観したとき、その研究の多くは博物館側に視座したものであった。来館者に係る研究は1930年代にRobinson (1933) やMelton (1936) によって始められ、1960年代までには来館者の行動観察等による実証的研究が示された (Derryberry, 1941; Parr, 1962; DeBorhegyi, 1963; Cameron, 1968, et al)。そして、1970年代は展示物を学習に関連した教育媒体としての利用と、その教育効果

が報告された(Shettel,1968;Screven,1974,et al)。その後、1980年代に入り70年代に議論されていたShettelの展示物を教育媒体でしか利用しない考え方にAlt(1977)らが批判し、教育効果の一義的価値としての捉え方からの反省と脱却が試みられた。そして、友人や隣人、家族等が交流する場である社会的公共施設としての役割に観点を移した議論が行われるようになったのである(Falk,1992;McManus,1987,et al)。しかし、これらのいずれの研究においても、諸岡(1990)によって指摘されているように来館者の実態を踏まえての議論にはなっていない。すなわち、来館者が何を考え、何を求めているかといった内的要求を見極め、その思いに応えるための論考がなされないまま博物館に関する研究が進められていたのである。

以上のように、これらの先行研究は、博物館側の視点にとどまり、来館者に視点が向けられていないという点に問題があるといえる。

方略のための枠組に関する先行研究とその問題点

一方、来館者への着目を示した研究には、市民が学習内容や学習方法に関する支援を求めたり市民の求めに応じて専門的助言を与えたりすることが博物館に求められているとした主張(伊藤,1993)や来館者と博物館とのコミュニケーションのために行うワークショップ等についての考察(若宮,1990)。更には、博物館展示を体験学習の場として様々な体験学習の実施について論じたもの(高井,1998)などがある。いずれも博物館に係る事項の一部として来館者の動向等についての議論はなされてはいるものの、来館者側の内的要求に視座した議論が行われないまま立案された方略ばかりである。また、博物館側と来館者との意識の乖離について(布谷,2005)や来館者の立場を研究した内容の希薄さを指摘している報告(榊原,1992)はある。しかし、来館者の心的要因に立脚し、実態に即した考究を行うまでには至っていない。

また、博物館のイメージ調査(布谷,1997)や科学系博物館に対するイメージ調査報告(財団法人文教協会研究助成研究成果報告,2007)といった来館者への心的アプローチに関する示唆が得られる報告はある。しかし、この研究報告においても、来館者の内的要因については言及されていない。さらに、マズローの欲求5段階説(Maslow,1943)の第5段階(自己実現:Self-actualization needs)を充当する方略(布谷,2005)の報告はあるが、いかなる観点によって来館者を捉え、どのように事業を展開するのかについての体系的な枠組についても示されていない。つまり、これらの先行研究においては、来館者への着目は認められるものの、来

館者の内的要因に視点がおかれていないため、方略的枠組の構築までには至っていないという点に問題がある。

本研究の目的

以上の結果は、事業展開における方略的枠組構築のための観点として、内的状況分析を行う必要性を示すものである。すなわち、来館者が潜在的に抱いている博物館に対する内的要因を抽出し、抽出要因を来館者の博物館に対する潜在的要求として博物館側が理解する。そして、方略のための枠組を来館者の年代別の特徴などを踏まえて構築する必要がある。その上で論考した帰結をもって事業を具体的に企画しなければならないのである。したがって、先行研究の問題を踏まえると方略的枠組構築のためには、来館者調査と内的要因の研究による新たな知見の提出は必至の事項であり、急務であるといえる。そこで本研究では、来館者の博物館に期待する内的要因を来館者が持つ潜在因子と位置づけ、来館者調査による探索的因子分析により潜在因子を抽出すること。さらに、方略的枠組構築のために必要な来館者の年代別特徴を把握することを目的とした。

調 査

(1) 予備調査

当館職員による「博物館に期待するもの」から連想される表像を整理した。表像を整理するためにKJ法を用いた。つづいて、導出した表像に対して教職経験者による精査を行い40項目の質問を得た。これらの質問事項をカテゴリー別に分類し重複事項を削除した。

発問として「いろいろな博物館を訪れてよいと感じるときはどんなときですか」を設定し、被験者の負担等を考慮した結果30項目の質問を本調査用として確定した。小学校高学年が容易に理解可能な文脈・文体の質問文にするため、小・中学校での教諭経験を持つ職員を中心に、質問文に適宜加筆訂正を行った。職員の家族及び来館者への予備調査を行い、質問文やアンケート方法等に問題がないことを確認した。確定した質問項目をTable1に示す。

(2) 本調査

方法

対象者 博物館来館者413名(小学校高学年～73歳:男201名、女212名)

質問項目の回答にはニュートン力学的時間概念を必要とする項目が含まれていることから、小学校高学年以上

Table1 小学校高学年以上を対象とした質問項目
(いろいろな博物館を訪れてよいと感じるときはどんなときですか)

問 1	立ち止まるような展示物を見つけたとき
問 2	珍しいものに会ったとき
問 3	年齢の違う人といろいろな話ができるとき
問 4	仲間とふれあえたとき
問 5	いろいろな体験ができるとき
問 6	本物に出会えたとき
問 7	博物館の人がヒントをくれたとき
問 8	博物館が住んでいるところの近くにあったとき
問 9	気軽に参加できるイベントがあったとき
問 1 0	無料で体験ができるとき
問 1 1	ゆっくりとすごせたとき
問 1 2	博物館の思い出ばなしに、会話がはずんだとき
問 1 3	時の流れを感じたとき
問 1 4	現実から少し離れた世界を感じたとき
問 1 5	地域のことがわかったとき
問 1 6	展示物をとおして新たな発見があったとき
問 1 7	ふるさとの歴史や自然がわかったとき
問 1 8	ふるさとの良さに気づいたとき
問 1 9	自分の知識・体験・特技を生かせたとき
問 2 0	たくさんの物にさわれたとき
問 2 1	本物の資料にさわれたとき
問 2 2	懐かしい気持ちになれたとき
問 2 3	知りたいことがわかったとき
問 2 4	専門的な世界にふれたとき
問 2 5	たくさんの知識を得られたとき
問 2 6	もっと聞きたいと思ったとき
問 2 7	もっと考えたいと感じたとき
問 2 8	もっと見たいと感じたとき
問 2 9	感動をだれかに伝えたいと思ったとき
問 3 0	展示物を見て不思議に思ったとき

を対象者に設定した。なぜなら、子供のニュートン力学的時間概念形成を説明した森（1986）の結果を踏まえると、小学校高学年以上でなければ十分な調査結果が得られないと判断したからである。

手続き 来館者に当館エントランスホールで質問紙を配付し回答を求めた。

小学校高学年以上であることを確認し質問紙を配付した。アンケートの概要と注意を記したフェイスシートを用いて説明を行い回答を求めた。

予備調査で確定した質問項目について、「いろいろな博物館を訪れてよいと感じるときはどんなときですか」と質問し、「とても感じる」から「まったく感じない」の5件法で回答させた。題意が不明な場合、もしくは考え込みそうなどときには「わからない」を回答するよう説明を加えた。

調査時期については、来館前、来館中、来館後を区別して調査計画を立案するといった議論はある（Falk,1992）。しかし、意識の平均化を求めるために調査時期は敢えて定めず来館前、来館中、来館後の全ての来館者を対象に調査した。

また、博物館来館者は初来館者と再来館者を包括して博物館来館者と定義した。よって、初来館者と再来館者の合算データを用いて分析した。

(3) 結果

1) **因子数の決定** 記入漏れ等があるデータを削除し403件の有効データを得た。詳細データは「とても感じる」から「まったく感じない」までの5件法の評定で求めた。

Table2 各項目に対する平均・標準偏差 (N=403)

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
平均値	4.57	4.74	3.85	4.11	4.62	4.79	4.31	4.28	4.52	4.66	4.56	4.24	4.25	4.45	4.37
SD	0.35	0.48	0.80	0.78	0.57	0.20	0.67	0.58	0.45	0.54	0.41	0.69	0.71	0.36	0.56
+SD	4.92	5.22	4.65	4.89	5.20	4.99	4.99	4.86	4.98	5.20	4.98	4.94	4.96	4.82	4.93
−SD	4.21	4.26	3.05	3.33	4.04	4.59	3.63	3.70	4.06	4.12	4.15	3.54	3.54	4.08	3.80

項目	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
平均値	4.60	4.41	4.48	4.29	4.59	4.63	4.44	4.66	4.47	4.60	4.35	4.33	4.49	4.46	4.67
SD	0.35	0.46	0.50	0.56	0.40	0.34	0.54	0.55	0.52	0.34	0.62	0.65	0.50	0.51	0.30
+SD	4.96	4.87	4.99	4.86	4.99	4.98	4.98	5.21	4.99	4.94	4.96	4.99	4.99	4.98	4.98
−SD	4.24	3.95	3.98	3.72	4.18	4.29	3.89	4.12	3.96	4.25	3.73	3.68	3.99	3.95	4.36

Table3 バリマックス回転後の因子負荷量

変数名	因子No. 1	因子No. 2	因子No. 3	因子No. 4	因子No. 5
もっと見たいと感じたとき	0.731	0.208	0.066	0.190	−0.051
もっと考えたいと感じたとき	0.699	0.232	0.264	0.032	0.087
たくさんの物にさわれたとき	0.683	0.097	0.289	0.138	0.080
自分の知識・体験・特技を生かせたとき	0.650	0.118	−0.159	0.140	0.332
展示物を見て不思議に思ったとき	0.628	0.043	0.327	0.056	0.052
もっと聞きたいと思ったとき	0.604	0.229	0.180	0.161	0.152
感動をだれかに伝えたいと思ったとき	0.546	0.258	0.055	0.023	0.395
仲間とふれあえたとき	0.247	0.717	−0.095	−0.114	0.229
年齢の違う人といろいろな話ができるとき	0.244	0.696	0.070	0.121	0.040
博物館の人がヒントをくれたとき	0.156	0.690	0.158	0.164	0.132
博物館が住んでいるところの近くにあったとき	0.190	0.627	0.192	0.055	−0.011
博物館の思い出ばなしに、会話がはずんだとき	−0.042	0.556	0.028	0.346	0.208
気軽に参加できるイベントがあったとき	0.205	0.503	0.087	0.304	−0.194
専門的な世界にふれたとき	0.149	0.191	0.727	0.012	−0.079
たくさんの知識を得られたとき	0.334	0.195	0.692	0.164	0.163
展示物をとおして新たな発見があったとき	0.199	−0.050	0.645	0.206	0.207
ふるさとの歴史や自然がわかったとき	0.146	0.072	0.556	0.122	0.632
本物に出会えたとき	0.176	−0.151	0.218	0.741	−0.061
ゆっくりとすごせたとき	0.157	0.108	0.038	0.616	0.125
現実から少し離れた世界を感じたとき	0.136	0.216	−0.031	0.546	0.328
時の流れを感じたとき	0.059	0.355	0.053	0.537	0.241
立ち止まるような展示物を見つけたとき	0.143	0.189	0.095	0.431	−0.239
地域のことがわかったとき	−0.146	0.293	0.250	0.410	0.340
懐かしい気持ちになれたとき	0.301	0.094	−0.009	0.139	0.645
ふるさとの良さに気づいたとき	0.248	0.115	0.399	0.054	0.608
本物の資料にさわれたとき	0.359	0.136	0.215	0.279	0.219
説明分散	3.788	3.122	2.471	2.428	2.127

クロンバック α 係数	0.897
有効サンプル数	403

各項目評定値の基本統計量をTable2に示した。平均±標準偏差の値が評定値の範囲を超えた項目2、5、10、23については、天井効果またはフロア効果が生じたものであると判断し、分析のデータから除外した。

次に、共通性の初期値を1とした、主成分分析により因子数の決定を試みた。その結果、5因子解が適当であると判断した。このときの5因子による累積寄与率は53.6%であり、最終説明分散は2.79であった。バリマックス回転後の各項目の因子負荷量を Table 3 に示し

た。

2) 性別及び初来館者と再来館者の等質性確認 男女による性差や、初来館者と再来館者との度数差異が無いことを確認するため等質検定を行った。

まず、男女及び初来館者と再来館者間の度数による検定を行った。その結果、男女及び初来館者と再来館者との度数による検定結果に有意差は認められなかった。

男女 : $\chi^2_{(1)}=0.30, ns$

初来館者と再来館者： $\chi^2_{(1)}=0.02$ 、ns

次に、男女におけるそれぞれの集団因子得点を用いて分散分析を行った。その結果、男女のそれぞれの集団には各因子とも1%確率において有意差は無く等質であることが確認できた。

因子1 $F(1,402)=1.82$ 、 $p>.10$ ns

因子2 $F(1,402)=0.37$ 、 $p>.10$ ns

因子3 $F(1,402)=2.75$ 、 $p>.01$ ns

因子4 $F(1,402)=1.82$ 、 $p>.10$ ns

因子5 $F(1,402)=0.82$ 、 $p>.10$ ns

ns：non-significant

これにより、集団を分けて考察する必要がなく、来館者の総数を有効データとする分析が可能であることが確認できた。

また、各年代の度数についても χ^2 検定を行った。結果、有意差は認められなかった。 $(\chi^2_{(9)}=13.74$ ns)

結果と考察

(1) 来館者が博物館に期待する潜在因子の抽出結果

男女による性差や、初来館者と再来館者間の集団的差異が無いことを確認した。そこで、来館者の博物館に期待する因子を探索的因子分析にて抽出した結果、5因子解を得るに至った。

抽出された潜在因子は次のように解釈した。

因子の解釈は、教職経験者を含む職員6名により行った。

Table 3において因子負荷量の絶対値が.50以上を示した項目(黒枠内)の内容を中心に、協議を行い、因子の解釈を行った。

因子No.1においては、もっと見たい・考えたい・聞きたいといった学びに対する欲求に関する項目の因子負荷量が高い。また、物に触りたいや体験を生かしたいといった、体験に関する項目の因子負荷量も大きい。すなわち、体験や欲求といった学びに関わる項目に因子負荷量が高いといえる。よって、因子No.1を「学びの意欲因子」と命名した。

因子No.2においては、仲間とのふれあい、年齢が違う人との会話、博物館の職員とのふれあいに高い因子負荷量を見ることができる。また、博物館の思い出話やイベントへの参加に関する項目にも高い因子負荷量を見ることができる。すなわち、イベントや世代を超えた人々との触れ合い、人との交流に関わる項目に高い因子負荷量が生じたといえる。よって、因子No.2を「ふれあ

い交流因子」と命名した。

因子No.3においては、専門的な世界にふれたとき、たくさんの知識を得られたとき、新しい発見があったときの項目に高い因子負荷量が見られる。すなわち、学びをさらに深めたいといった気持ちの表れであるといえる。よって、因子No.3を「学びの深まり因子」と命名した。

因子No.4においては、本物に出会えたとき、ゆっくり過ごせたとき、現実から少し離れた世界を感じたとき、時の流れを感じたときの項目に高い因子負荷量を見ることができる。すなわち、ゆっくりとした時間の中で本物に触れるとき、遠い過去に思いを馳せるような、心がゆさぶられる瞬間を感じることが満足感を得られる要因であることが分かる。よって、因子No.4を「心のゆさぶり因子」と命名した。

因子No.5において、懐かしい気持ちになれたとき、ふるさとの自然・良さに気づいたときの項目に高い因子負荷量を見ることができる。よって、因子No.5を「ふるさと愛因子」と命名した。

なお、各成分における α 係数は.897であり、項目の内的整合性は極めて良好であるといえる。

(2) 各年代の特徴と回数別特徴

1) 小学校高学年の特徴 小学校高学年については、Fig 1、2より、学びの意欲が高い。また、Fig 4より、ふるさとに対する愛着も深いことがわかる。しかし、Fig 1、2より、学びの深まりや、ふれあい交流の因子には低い因子得点が見られる。すなわち、博物館では人とのふれあいを求めるのではなく、ふるさとに関連する内容を通して学んでいくことを期待しているといえる。

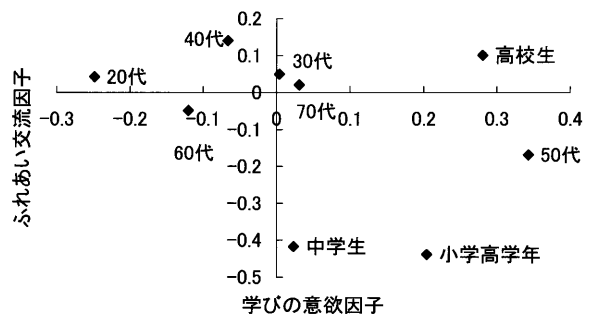


Fig1 年齢別因子得点による、
学びの意欲因子×ふれあい交流因子の分散図

2) 中学生の特徴 中学生については、Fig 1、3、4より、心のゆさぶりの因子は高く、Fig 1、4から、ふれあい交流因子やふるさと愛因子の因子得点が低い。すなわち、博物館において、触れ合いやふるさとへの愛着に

は関心が少ないが、心をゆさぶられる体験を求めているといえる。

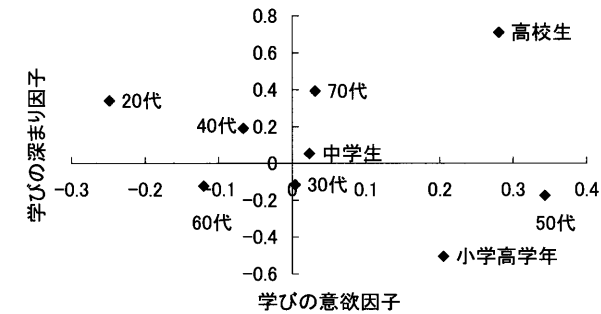


Fig2 年齢別因子得点による、
学びの意欲因子× 学びの深まり因子の分散図

3) 高校生の特徴 高校生においては、Fig 4 より、ふるさと愛因子に低い因子得点が見られる。しかし、Fig 1、2、3 より、他の因子内容に対しては強く望むところがある。すなわち、ふるさとへの興味は薄い、学びや心のゆさぶりを博物館に求めている。そして、多くの因子に高い因子得点が見られることから、博物館に来館する高校生の多感さを示唆するものと考えられる。

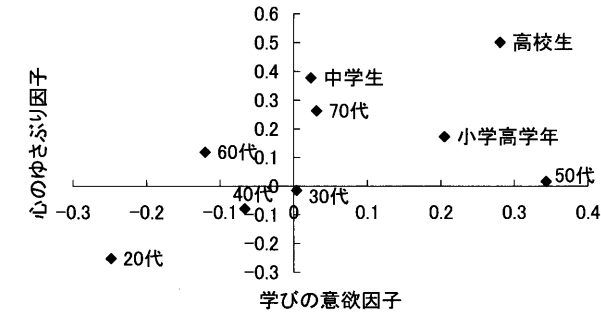


Fig3 年齢別因子得点による、
学びの意欲因子 × 心のゆさぶり因子の分散図

4) 20歳代の特徴 20歳代（大学生含む）においては、Fig 2 より、学びたいという思いよりは、学びを深めたいと思う傾向が強い。また、Fig 3 より、心のゆさぶりについては求めている。

5) 30歳代の特徴 30歳代においては、Fig 1、2、3、4 より、博物館への期待は少ないことが分かる。換言すれば、博物館への関心の希薄さを表出しているものといえよう。また、Fig 1、4 より、ふれあい交流因子とふるさと愛因子に若干の傾向を見ることができる。すなわち、主体的に博物館を利用するというよりも、家族のために利用するといった動向に起因するものと推察される。

6) 40歳代の特徴 40歳代においては、Fig 1、2 より、ふれあい交流と学びの深まりを求める傾向が見られる。子供の成長に合わせた家族での触れ合いや、子供と

一緒に参加した催しものの参加体験によりイメージされた概念に起因した特徴であると推察される。

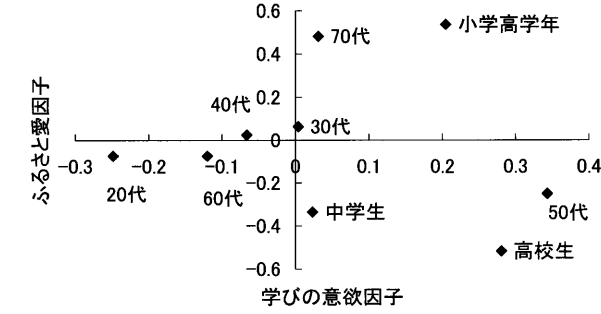


Fig4 年齢別因子得点による、
学びの意欲因子 × ふるさと愛因子の分散図

7) 50歳代の特徴 50歳代においては、Fig1より、学びの意欲が大きく、学びを博物館に期待しているが、Fig1、2、3、4より、他の因子内容に期待を見出すことができない。

8) 60歳代の特徴 60歳代においては、Fig3より、博物館に心のゆさぶりを求めているが、Fig1、2、3、4より、他の因子に関する期待は少ない。

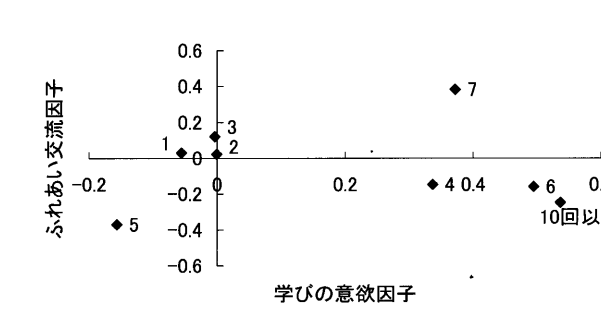


Fig5 回数別因子得点による、
学びの意欲因子×ふれあい交流因子の分散図

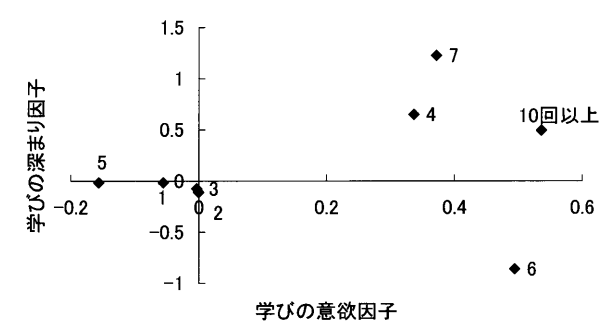


Fig6 回数別因子得点による、
学びの意欲因子× 学びの深まり因子の分散図

9) 70歳代の特徴 70歳代においては、Fig 2、3、4 より、博物館に学びの深まり、ふるさと愛、心のゆさぶりを期待している。すなわち、ふるさとを通して学びを

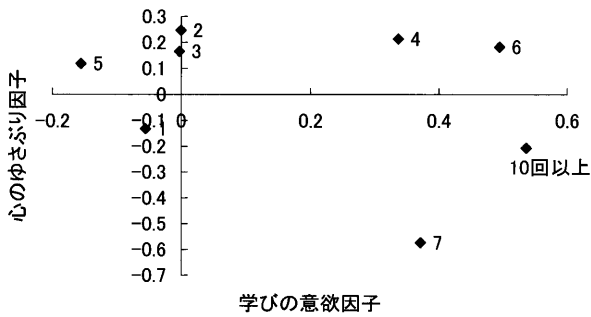


Fig7 回数別因子得点による、
学びの意欲因子 × 心のゆさぶり因子の分散図

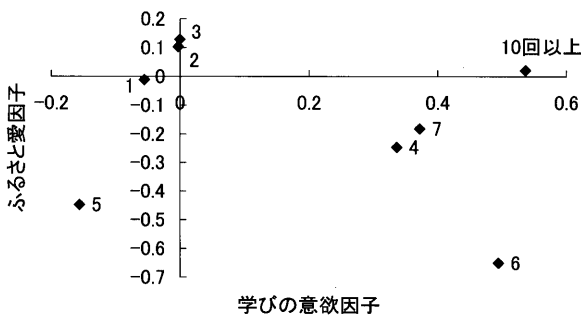


Fig8 回数別因子得点による、
学びの意欲因子 × ふるさと愛因子の分散図

深め、その行為をする中で心がゆさぶられるような体験を博物館に期待しているといえる。

10) 回数別特徴 回数別としては、初来館者と再来館者での顕著な特徴は現れなかった。そこで、十分に精査された数値ではない粗値ではあるが、各回数による検討を行った結果、参考となる考察を得るに至った。1つには、Fig 5、6、7、8から3回を境として、学びに関して2極化傾向が見られる。すなわち、3回以下の来館者は博物館に学びの場を期待して来館している傾向が弱く、4回以上になると博物館に学びを求める傾向が強くなる事が分かる。2つには、10回以上の来館者は、Fig 6より、学びの意欲、学びの深まり因子に高い因子得点が見られる。しかし、Fig 5、7、8より、ふれあい交流因子及び心のゆさぶり因子、並びにふるさと愛因子において因子得点が低い。すなわち、博物館で多くを学び、深められることを期待しているといえる。3つには、初来館者は10回以上の来館者の対極に位置するといった特徴が見られる。以上の3考察は粗値によるものであるために参考情報である。

総合考察

本研究では、まず、来館者が博物館に期待する潜在因子の抽出を行った。その結果、「学びの意欲因子」、「ふれあい交流因子」、「学びの深まり因子」、「心のゆさぶり因子」、「ふるさと愛因子」といった5因子を抽出することができた。(クロンバック α 係数は .897)

次に各年代における特徴を考察した。各年代については、以下のように特徴付けることができる。

小学校高学年においては、博物館でふるさとを感じたこと、意欲的に学びを広げていきたいと感じていることが明らかとなった。しかし、学びを深めることには期待をしていない。このことから、小学校高学年段階では深めるべき基礎的知識の希薄さが、知識や学びを深めるよりも学びを広げたいと感じる傾向として強く表出したものと推察される。したがって、当館においては、ふるさとに関連した事象を通して学びを広げていく施策を講じることが重要であり、次年齢段階での学びの深まりにつなげられる仕組みを考えなければならないといえる。

中学・高校生においては、博物館に心のゆさぶりを期待していることが明らかとなった。中でも高校生には、多くの因子に高いレベルでの期待感を見出すことができる。しかし、ふるさとについての思いは少なく興味も浅い。精神的自立の時期であることを鑑みれば、内外世界の共時性 (Synchronicity) が生じるこの時期に、ふるさと感を心の中に持ち続けてもらうという命題を果たすことが、博物館との関わりにおいての重要な事項であるといえる。

大学生を含む20歳代では、学びを深められることを博物館に期待していることが明らかとなった。小学校高学年と違い、ある程度の知識を有することから、学びの広がり以上に学びの深まりを求める傾向が強く表出したものと考えられる。したがって、当館は学びの深まりに応えられるように、学芸員を中心とした高い学識と専門性を保持し続ける必要があるといえる。

30歳代・40歳代においては、特に博物館に期待する要因を見出すことはできなかった。しかし、40歳代にふれあい交流と学びの深まり因子に若干の傾向を認めることができる。これは、30歳代が比較的小さな子供を連れてくる場として博物館を利用するのに対して、40歳代になると子供も成長し、親への質問や親子で参加するイベントが増えてくることに起因するものと推察される。よって、当館の催しもの等では40歳代を中心とした参加者の要求に応えられる内容を企画し、再来館への動機付けを行うことが必要であると考えられる。40歳

代の親が、小学校高学年の子をもつと考えれば、博物館にとって必要不可欠なターゲット世代であるといえる。

また、30歳代・40歳代が博物館への関心が薄いことは、現在までの文化行政の取り組みを含めた多くの省察を有していると考えられる。

50歳代においては、学びの広がり、60歳代においては、心のゆさぶりを博物館に期待していることが明らかとなった。

70歳代においては、学びの深まり、ふるさと愛、心のゆさぶりを博物館に期待していることが明らかとなった。しかし、学びの意欲については博物館への期待が低い傾向にあった。したがって、ふるさとを通して学びを深める中で、心がゆさぶられる体験を博物館に期待しているものといえる。

また、来館回数においては粗値での考察ではあるが、4回以上の来館者に博物館に学びを求める傾向が強く見られる。この傾向は4回以上の再来館者が、初来館時から学びを求めていたのか、来館回数が増すにつれ学びの欲求が高まったかについては、別に議論を要するところである。しかし、博物館への再来館者を増加させる必要な要素が学びへの仕掛けであることは確かなところである。

以上のように考えると、来館者に応えるべき事業のための方略的枠組みとして各年代別の特徴等を用いることができる。年代の特徴を検討し、着目した年代に適した企画コンセプトを明確化することが必要である。また、漠然とした「来館者」の観念的な捉え方を、より具体性を持った概念として捉えることができるかと考える。すなわち、先行研究で行われていない来館者側に立った見解の一つを示すことができるといえる。さらに、来館者の博物館に求める潜在因子を5因子解にて抽出したことで、来館者の要求に応える事業の企画を具現するための知見を提出することができたかと考える。しかし、世代を規定しない事業企画のための方略的枠組みの構築に関しては、年代ごとの潜在因子に差異があることから、各因子の関係性を検討する必要がある。また、全世代にわたる観点と年代ごとの観点を包含する総合的観点としての知見には至っていない。よって、各因子及び、その上位因子の内容によるクラスタリング（clustering）の見出等が今後の課題となろう。

また、本研究で示した因子を博物館で行う討論等の前提となる具体的な概念として提供することができたかと考える。これにより、今までの経験則による抽象化された観念での討論や議論をより客観的で実践的な議論へとパラダイムシフトさせることが可能になったと考える。さ

らに、館内アンケート作成においては、来館者の要求に即したサービスを行っているかを確認する質問事項を導出し、サービス向上の一助としての参考資料として利用することが可能である。

昭和50年代後半から教育普及活動が活発化し、生涯学習の場としての最重要施設として博物館は期待されている（小原,2000）。これまでのように年代の特徴や来館者の要求を考慮しない催しものを企画していたのでは、来館者に豊かな学びを提供することはできない。各年代の特徴を踏まえ、イベントのコンセプトを明確にしたうえで参加者を満足させるイベントを担保し、大堀（1997）が主張する生涯学習施設としての体験学習の場や、くつろぎのスペースを確保することが重要である。

今回の研究で得た知見は、担当者の企画力を強化するために有用であると同時に、館内アンケートの作成及び館内展示、並びに企画展の評価にも生かすことができる。また、再来館者の特徴としてあげられる学びの深まりへの期待に応える企画内容でなければ、来館者の再来館率を上げることはできない。すなわち、来館者が求める学びの具現は、潜在因子に起因する事業の帰結であるといえるのである。

今後の課題

以上のような見解に立脚したとき、次のような研究の必要性が生じた。

1つに、来館回数と来館者意識との関係調査である。本研究により、3回以下と4回以上では、博物館に求める学びの傾向に差異が認められた。しかし、4回以上の多来館者が、初来館時から博物館に学びを求めていたのか、または来館を重ねて学びの要求が強くなったのかについては、本研究からは言及できない。また、本研究においては来館者の潜在因子を分析することを目的としたため、初来館者と再来館者を包括したものを来館者と定義した。しかし、非来館者を初来館者にさせ、さらに再来館者とするためには非来館者と来館者及び初来館者と再来館者を個々に取り扱い、各々の因子間差異や関係性を分析する必要もある。したがって、博物館と深い関係を築くことができる再来館者を倍旧し、文化振興の担い手を養成するためにも今後必要な調査になるといえよう。

2つに、各年代間の特徴の関係性と、各因子間の関係性の分析及び検討を行うことである。関係性を明示するモデルの提出は、事業のコンセプトに基づき複雑な構造

構築に対する指針を得ることに寄与するものである。

3つに、潜在因子を独立変数、来館者の来館意欲を従属変数とした、来館意欲を規定する来館者の潜在因子特性を調査することである。来館者が強く来館意欲を持つための因子特性を明らかにし、来館者が期待する潜在因子と組み合わせることで、戦略的で効果的な事業の考案が可能になるといえる。

Reference

- Alt,M.B.,1977.EvaluatingDidacticExhibits:Acritical LookatShettel'sWork,Curator,20(3),pp.241-258.
- 伊藤寿朗 1986.“現代博物館の課題と展望”,長浜功編,現代社会教育の課題と展望,明石書店,東京,pp.233-296.
- 伊藤寿朗 1993.市民のなかの博物館,吉川弘文館,東京,190p.
- 嘉田由紀子 1995.“生活世界と住民の意思決定”,生活世界の環境学,農山漁村文化協会,東京,pp.74-98.
- 金山喜昭 1999.町づくりと市民意識の形成に関する地域博物館の可能性,博物館学雑誌,24(2),pp.37-50.
- Robinson,E.S., 1933, The psychology of public Education,American Journal of Public Health and the Nation's Health,23(2),pp.123-128.
- 諸岡博熊 1990.“MI (ミュージアム・アイデンティティ)” 変革する博物館第三世代,創元社,東京,494p.
- 榊原聖文 1992.もう一つの博物館学を求めて,博物館学雑誌,17(2),pp.9-24.
- 日本博物館協会 2009. 日本の博物館総合調査研究報告,pp.13-14.
- Falk,J.H.&Dierking,L.D 1992.TheMuseum Experience,Washington,DC,WhalesbackBooks, pp.115-125.
- 国立博物館 2007. 国民の科学リテラシー向上における科学系博物館が果たす役割に関する実証的研究,平成17~18年度 財団法人文教協会研究助成研究成果報告, pp.17-34.
- 小原巖 2000.博物館展示・教育論, 樹村房, 東京, pp.104-111.
- 大堀哲 1997.教師のための博物館の効果的利用法, 東京堂出版, 東京, pp.26-28.
- Derryberry 1941.Exhibits,American Journal of Public HealthandtheNation'sHealth,31,pp.257-263.
- Parr,A.E.,1962.SomeBasicProblemsofVisual Education by Means of Exhibits,Curator,5,pp.36-44.
- De Borhegyi,S.F., 1963.Visual Communication in the ScienceMuseum,Curator,6,pp.45-57.
- Cameron,D.F., 1968.A viewpoint:The Museum as a Communications System and Implications of the Museum Education,Curator,11,pp.33-40.
- Shettel,H.H., 1968.An Evaluation of Existing Criteria for judging the Quality of Science Exhibits,Curator,11,pp.137-153.
- Screven,C.G.,1975.TheEffectivenessofGuidance Devices onVisitor Learning,Curator,18,pp.219-243.
- McManus,P. 1987.It's the Company Your Keep:The Social Determination of Learning-related Behaviour in a Science Museum,international journal of Museum Management and Curatorship,6,pp.263-270.
- 布谷知夫 1997.利用されることで成長発展する博物館をめざして,博物館研究,32,31-35.
- 布谷知夫 2005.博物館の理念と運営—利用者主体の博物館学—,雄山閣,東京,pp.160-168.
- 若宮広和 1990.市民とのコミュニケーション,博物館ハンドブック,雄山閣,東京,pp.156-157.
- 高井芳昭 1988.博物館における体験学習について—歴史系博物館の体験学習室を中心に—,博物館学雑誌,13,7-18.
- Maslow,A.H., 1943.ATheory of Human Mativation,Psychological Review,50,370-396.
- Melton,A.W., 1936.Distribution of Attention in Galleries in a Museum of Science and industry,Museum News,14,pp.6-8.
- 森一夫 1986.自然認識の発達と形成に関する教科教育学的研究, 風間書房, 東京, pp.51-108.